

NPO法人高齢社会をよくする 女性の会 会報

No. 308

2026年3月発行

NPO法人高齢社会をよくする女性の会
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-3356-3564
FAX. 03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477



リレートークの登壇者の皆さん

新年のご挨拶	木村 民子	1
歳末名物・女たちの討ち入りシンポ		
「今を生きる私たちの 戦後80年」		2
プロローグ 朗読『私は13歳だった』より		2
ミニトーク 「私の戦後80年」	堂本 暁子	3
リレートーク 戦争を語り継ぐ 登壇者紹介		4
手記一覧		8
8月例会千葉商科大学「よろず隊」の紹介		9
学生との意見交換		11
第4回樋口恵子賞表彰式		13
本の紹介・ご報告・事務局だより・編集後記		16

新しい時代の到来に！ 戦後80年プラス1

NPO法人高齢社会をよくする女性の会 理事長 木村 民子

新しい年が明けました。皆様には健康で幸せな年でありますよう、謹んでお祈り申し上げます。

一昨年の元日に起こった能登半島の大地震から2年余り、未だに復興は道半ばと言われますが、私たちもできる限りの支援を続けていきたいと思っています。

また、このたびの予想をはるかに超える大雪の被害に遭われた全国各地の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

さて、昨年2025年は、様々な節目の年でした。昭和100年にちなんで10月に開催した第44回高齢社会をよくする女性の会全国大会in熱海では、北京女性会議から30年の記念すべき年として男女共同参画を、さらに介護保険創設25年をテーマに、2日間にわたり開催いたしました。遡って4月例会は、女性参政権獲得80年を記念し、改めて市川房枝さんの功績を讃えました。

また、歳末恒例女たちの討ち入りシンポでは、戦後80年の手記を募り、14名の方に壇上で朗読していただきました。なお、戦争体験、疎開の生活、戦後の混乱、平和・反戦の思いなどが詰まった総勢21名の方からの手記は、改めて文集にまとめましたので、どうぞそちらもお読みください。

節目の年として忘れてはならないこれらのテーマに、私たちの活動がどれほど肉薄したかはわかりませんが、ある意味では警鐘を鳴らし続けたと言えるのかもしれません。

初の女性総理誕生に期待が寄せられたものの、日本の政治の舵取りには少なからず、不安を覚えます。

この先の時代も、平和が脅かされることがあってはなりません。

高齢期に生きる私たちが、新しい時代を築くのだという気概を持って、皆さまと前に進みたいと思います。

2025年12月13日(土) 於/東京ウィメンズプラザホール

今を生きる私たちの 戦後80年 ～記憶をつなぐ 言葉をつむぐ～

年を経ても 老いても 忘れられない 戦禍の記憶を語ってください 今しかないから
戦争を知らずに育った 団塊世代さえ 親たちの苦勞が身に沁みていた
でも、戦争のない時代しか 核の脅威のない世界しか 知らない子どもたちには
今こそ伝えたい 平和は 力でなく 言葉で紡いで いくものと

(討ち入りシンポのチラシ前文より/木村民子・記)

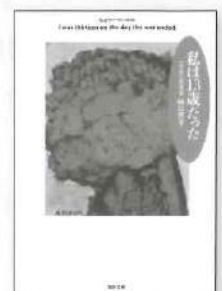
討ち入りシンポのプロローグとして、樋口恵子名誉理事長が1996年に執筆された
『私は13歳だった 一少女の戦後史』のあとがきの部分の朗読をテープで聴いていただいた。

(朗読はフリーアナウンサーの石田江利さんによる)

あの日、私は一三歳だった。新しいクラスメートは一二歳だった。私は残留婦人、友だちは一歳のちがいで残留孤児。そして残留婦人は、本人の意思で現地に残った、と見なされる、という解説にがく然とした。

父母に病弱な体を養われていた一三歳の私。もし環境が変わって、中国にいたとして、私の意思で異国に残ることを決意できただろうか。かなりませた子どもだった私だが、恋人ができるにはまだ若すぎる。本人の決意といっても、それは父母はじめ家族の窮状を見かねてであつたり、情報を十分に知らされなかつたりしたからではないだろうか。その後、現地で中国の人と結婚し、子どもが生まれ、中国とのきずなが深まったとしても、それと望郷の念とはまた別である。すべて「本人の意思」として処理されるとは、なんというむごさ、なんという国家の無責任。……

(あとがきから抜粋)



私は13歳だった
一少女の戦後史
著・樋口恵子
筑摩書房



(右)
赤ちゃんの頃



(中央)
幼い頃の筆者と兄



(左)
大学生の頃

「私の戦後80年」

ゲスト 堂本 暁子さん



壇上の堂本暁子さん、左は聞き手の木村理事長

私は東京の自宅も学校も空襲で焼けたので、終戦（1945年8月15日）を中軽井沢で迎えた。高校時代は旧海軍予科練の跡地の校舎に通学、大学時代は山登りに没頭し、卒業後、私のキャリアのスタートはテレビジャーナリスト。基本的にジャーナリストは、社会体制の監視役的な立場なので、市民の視点、生活者の視点から物事を考えることを求められた。メディアはまず市民の立場に立って権力と社会悪に対する監視者でなければならない使命と責任を担う。

その後、国会議員になっても、千葉県知事になっても、そうした視点が私の基本的な姿勢になった。戦後、ジャーナリストとして仕事を始めた頃、日本の経済復興が軌道に乗り始め、東京オリンピックを担当した。当時の学生には応用力と計算力もあり、バランスが良かったが、経済成長期に入り応用力が低くなった。これでいいのか、愛知揆一文部大臣に迫ったが、さらに偏差値中心の時期に突入していた。その後、私はベビーホテル問題に取り組んだ。（ベビーホテル・キャンペーン 1980年3月～1981年6月）。1989年、日本社会党党首土井たか子さんに誘われて、国会議



2001年当時千葉県知事初当選の堂本暁子さん

プロフィール

1932年アメリカのカリフォルニア州で生まれ、東京で育つ。東京女子大学文学部卒業後、TBSに入社。報道局で記者・ディレクターとして活躍。

1981年『ベビーホテル・キャンペーン』で日本新聞協会賞などを受賞。

1989年参議院議員に初当選。男女共同参画社会基本法、DV防止法などの制定に関与。

2001年千葉県知事。

東日本大震災後は「男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表」。

員に立候補、無所属で当選。参議院議員2期12年。黨員にならず自由に活動するも予算委員会、外務委員会、環境委員会など、思う存分仕事ができ、大変贅沢な立場で国会議員をさせていただいた。「あんな^{ちみもうりやう}魑魅魍魎なおじさんたちのいるところなんかイヤ」と思っていたが、本気で国会を見渡すと女性の顔は少なくこれではいけない、と強く思い仕事に励んだ。その後、千葉県知事を2期務め「健康福祉千葉方式推進プロジェクトブレーメン」を立ち上げ、地域の社会づくりに貢献した。

最後に「会員の皆さんへのメッセージは？」と木村理事長が尋ねると一言、「自分らしく生きなさい！」でした。

(伊藤恭子・記)

リレー トーク

戦争を語り継ぐ



壇上で朗読の順番を待つ皆さん



90歳の安久美与子さんも
自作を元気に朗読

リレートーク、朗読順 (写真椅子席と同じ)

08 袖井 孝子	09 稲葉 敬子	10 白井千賀子	11 松田 敏子	12 並木きょう子	13 林 千根	14 木村 民子
07 円 より子 (代読/稲葉敬子)	06 小堀鷗一郎 (代読/玉木康平)	05 柳川眞佐子	04 田崎 富子 (代読/平野直樹)	03 阿部 俊子 (代読/筒井圭子)	02 安久美与子	01 渥美 雅子

特別寄稿

小堀 鷗一郎 (訪問診療医)

敗戦の年(1945年)の3月長野県蓼科高原に疎開した。小学校(成城学園初等学校)1年修了の時点である。疎開先である蓼科高原でも私と2歳違いの姉は極めてユニークな存在であった。蓼科高原の児童は戦前からの別荘に疎開してきたか、学校の寮に集団疎開してきたかのどちらかであり、地元の児童と共に6km離れた湯川村の学校に通学したが、私と姉だけは豊かな自然を師とする生活が最良とする両親の方針で学校へは行かなかった。この方針はその年の8月に敗戦となっても変わらず、すべての疎開学童が各地の原級に復しても姉と私は翌年の4月まで毎日野山を駆け回って暮らした。

敗戦後父は蓼科高原に残って作画に励み、母が私と姉を連れて世田谷梅丘の自宅に帰った。玉川電鉄の市街電車で数駅の所にある三軒茶屋の焼跡の中に建つ映画館はフランス映画専門館で母は私と姉を連れて

この映画館に日参することになった。幸い姉と私が通学する成城学園は自由教育を主眼とする学校で、教壇も試験も通信簿も宿題もなく、我々はただ毎日学校に出掛けて行って好きなことをやっていればよかった。カリキュラムもユニークで「遊び」や「散歩」の時間、「国語」の時間と別個に「文学」の時間があつたし、また「映画」の時間もあつた。クラスは30数名の生徒からなり、数名がグループを作つて机を囲み、それぞれのグループは頻回に演劇を上演することになっていたが、その背景には、演劇は自己表現を豊かにする、という理念があつたようである。お互いに80歳を超えた昨今、成城学園時代の友人に自己主張の強い人間が多いように思われるのはそのせいかも知れない。

かくのごとき少年時代が私の外科医と訪問診療医を合わせた60年間に及ぶ医師生活にどのような影響を及ぼしたか、それはこの60年間のどこかで私と関わりをもつた第三者が判断することである。

私の戦争体験

渥美 雅子（千葉県千葉市）

私は昭和15年生まれである。殆ど戦争と同時に生まれた。生まれたところは静岡県浜松市。浜松市には、高射砲連隊の基地があったので、それをめがけて連合軍が毎晩のように空襲をかけてきた。また、遠州灘からの艦砲射撃もあった。

私は子供の頃、寝巻を着て寝たことがない。防空頭巾をかぶり、モンペをはき、藁草履をはいて寝ていた。すると、夜中にウーッとサイレンが鳴る。空襲警報発令！ ソレっとなりに跳び起きて防空壕に駆け込む。

食べ物は殆ど代用食。米はない。麦、粟、ひえなど。家では鶏と兎を飼っていたので、その世話をするのが私の役目。ある日、畑で鶏に餌をやっていると、大人たちが集まってきた。誰かがラジオを持ってきた。大人たちは音量をいっぱいにして天皇陛下の声に聞き入っている。その声に男たちは怒鳴りだし、女たちは泣き出した。一体なにがどうしたの？ これが私の終戦体験である。

それからの日々は、食糧難と貧乏との戦い。ついでに想起こせば、私の両親は仲が悪かった。いうならば、DV家庭であった。それが戦争の故なのかどうか分からない。

ただ、私が学校にあがって良い成績をとったり、何かで表彰された時だけは、二人ともニコニコと機嫌が良くなって、母は目いっぱいのご馳走を作ってくれた。で、親を喜ばせることが、何よりも私の日々の課題となった。

平和という問題を考える時、そんな小さなことではない、と思う。ただまずは、身近な小さな平和を大切にしなければ、大きな平和には辿りつけないようにも思う。

戦後80年。幸い日本では平和が続いている。この平和をもっともっと続けたい、広げたい。それにはどうすればよいか。今こそ考える時だと思う。

私も戦争孤児だったかもしれない

円 より子（東京都葛飾区）

私の子ども時代、8月15日になると、母は必ずすいとんを作った。戦争中、戦後のしばらく、食べるものが本当になかったこと、多くの人が戦争で亡くなったことを話し、すいとんを食べる前に、亡くなった人たちを思い黙禱するのが習わしだった。そして、女学校もろくに行けず、勤労動員に駆り出されていたこと、今あなたが勉強できるのはとても幸運なことなのよと母は話した。

父は大学生で学徒出陣。海軍の飛行機乗りとなったが、多くの友人を亡くし、我が家はよく父の若い部下たちが遊びに来たが、その食事の席で父が歌う「同期の桜」はいつも哀愁を帯びていて、私は哀しい歌だと思っていた。小学生の頃に見たフランキー堺主演の映画『私は貝になりたい』も強烈な印象として残り、後年、議員としてBC級戦犯やシベリア抑留の解決に取り組むこととなった。

政治の世界に全く縁のなかった私を政界に誘ったのは細川護熙氏だが、細川政権発足直後の8月15日、戦没者追悼式典で首相として初めて、彼は「日本のアジアに対する加害責任」に言及した。東京や各地の空襲、原爆や沖縄の悲惨さ、また戦後の食料も弾も無い中で戦わなくてはならなかった人たちのことだけでなく、満蒙開拓団でソ連兵に差し出された女性たちや、命からがら引き揚げてきた人たちの話を読み聞きするたびに、中国残留孤児も、もう少し早く生まれていたら、私だったかもしれないと胸が苦しくなる。戦争は他人事ではないのだ。

今、ガザでも、ウクライナでも人々が死に、町が瓦礫と化している。戦争がどれほど悲惨か、どちらの側でもすべての人の人生を狂わせるものだということを、戦争を知らない世代にしっかりと語り継いでいくことはとても大事だと思う。

戦後の物資

林 千根 (東京都新宿区)

私が小学校に入学したのは昭和24年でした。赤いランドセルを背負って通学しましたが、それはボール紙を芯にした布製のものでした。ノートは紙の質が悪く、消しゴムも固く、使うとよく紙が破れました。学校は戦前に建造された鉄筋コンクリート3階建て、外壁は迷彩色の塗装がそのまま、3階全部は焼け出された近くの高校が再建されるまで使っていました。教室には戦前は近代的暖房装置があったものの戦争中に金属を供出したため、その痕跡のみがありました。

冬にむけて、羊毛のオーバーを着せてもらいました。ある日、全校生徒の集会で、同じコートを着ている人を見つけました。帰宅してそのことを母に言うと、「あっ、そのコートはララ物資の配給だったのよ」とのことでした。

ララ物資。アメリカに移住した一世2人が日本の戦後の窮乏を助けるために救済事業を始めました。その活動は後にアジア救済連盟として組織化されました。その組織がアメリカ国内外から寄付を募って、日本に支援物資を送ってくれたのです。その物資は組織の名前、Licensed Agencies for Relief in Asiaの頭文字をとって、ララ物資と呼ばれるようになりました。物資の内訳は食料7、衣服2、医薬品1の割合だったそうです。その活動は1946年から1952年まで続きました。

私たちが給食でいただいた決しておいしいとはいえなかった脱脂粉乳はララ物資だったのです。



無題

白井 千賀子 (神奈川県横浜市)

幼い頃の記憶だが、焦土と化した沖縄で遺骨を収集して魂魄の塔に収めていた人々を忘れられない。私にとって、沖縄で育ったことが何よりも平和を願う原点になっている。

占領下の沖縄では決められた場所で住むことを強制され、軍作業に行くことを指示された。土地は取り上げられ米軍の基地が建設されていく。戦争の傷も癒えないうちにあれよあれよと言うまに沖縄は米軍基地だらけになった。鉄条網に囲われた基地にへばりつく様に私たちは暮らしていた。全てが軍の妨げにならないように暮らすことを強要された。全島の灯りを消して敵に見つからないようにという灯火管制もあった。

ベトナム戦争が始まり嘉手納基地から軍用機が飛び立って行く。人を殺す戦争に加担している沖縄で良いのかという思いを誰もが持っていた。沖縄戦の洗い出しが進められ、日本軍による蛮行、集団自決、強烈な戦火による死亡だけでなくその後遺症による精神病の発症、様々なことが明るみにでた。戦争は人を幸せにすることは無いと心の底から思っている。

沖縄では戦争による多くの死を忘れないように、平和への決意を再確認するために平和の礎^{いしじ}を建て慰霊の日を設けている。6月23日の慰霊の日には真東の久高島から朝日が昇る。沖縄戦最終の地であった摩文仁の丘に立つと死者の霊が話しかけてくる。戦火の激しくなった沖縄から子どもだけでも助けたいと願い学童疎開船対馬丸に乗せられた母の従兄妹たちの名前もそこに有る。大叔母夫婦も亡くなり従兄妹たちの名前を覚えている人もいなくなった。亡き母は平和の礎に刻まれた彼らの名前に生きていた証を求めた。

広島、長崎と原子爆弾による被害も大きく、後遺症に苦しんでいる人もいる。戦争は決して始めてはいけない。戦争で解決することは無い。無限の苦しみを人々に与えるのだということを心に刻み生きている。

会場発言と 閉会&フィナーレ

総合
司会

渡辺 敏恵 副理事長



今回の主題のため
か、例年の“討ち入
りシンボ”のような、
一年の打ち上げで今
年も締めくくるぞ！
という華やかさを含
んだ雰囲気ではな

く、初めからどこか静かな、湿度を感じるよ
うな会場の空気があった。手記のほとんどを
ご本人が朗読されるので、壇上から語られる
一言一言が実感のこもった心に響くものとな
り、客席の私語も無く、静まり返った会場に
80年前の光景が蘇ってきたように感じたのは
私だけではなかったと思われる。聴衆の年齢
の差は見受けられたが、一人ひとりの表情に
は共通する何かを感じた。

手記を書かれた方からの追加発言

安久美与子さん「私のような体験はもう私一
人でたくさん、自身が戦争体験の最終ラン
ナーだと思っている」

並木きょう子さん「戦争が無ければ実際に会
えていた祖母の事を書くとも今でも涙が出る、
戦争前の雰囲気を感じたら止めなければ」

会場フロアからの発言

杉啓以子さん「戦後生まれではあるが、今日
の数々の戦争体験を聞いて、涙が止まらない。
両親も祖母も東京下町住まいだったので、よ
く大空襲のことなどを聞きました。たとえ戦
後育ちであっても、両親のような戦争経験者

から聞いたことを、次の世代に自然に思い出
話として語り、伝えていくことをやめてはい
けないと思っている。戦争のない日本をどう
作っていくのか、声を上げ続けたい」

長井秀子さん「戦争中の小学校教育を受けた
世代として、戦争一色だった教育の内容が、
終戦と同時にひっくり返った、という感覚が
今でも心の中に残っている。教育がいかに大
切であるかを今、ぜひ伝えたい。子供たちに
平和教育をしっかりと、今が戦後であって、
二度と戦前にならないで、戦後がずっと続い
てほしい」と戦中派からの発言もいただいた。

今回、年末のひと午後を、〈戦後80年〉と
いう現実をふまえて、本会のメンバーが中心
となって、「戦争体験の事実」を文章にして、
声をあげて朗読し、様々な世代がそれを生の
声として受け取ることが出来たことの〈意味・
意義〉をここに改めて、一人ひとりが受け止
めてほしいと感じた。

どんな形ででも、語り、伝え、教え、とも
に考えていく、考え続ける、ということの大
切さを忘れてはいけない。本会がそれを継続
できる助けとなる団体であり続けられるよ
う、これからも、ともに努力していかなけれ
ばならない、と改めて感じた。

最後にフロアからの盛大な拍手が朗読した
方々に送られ、壇上の方々も、涙の跡を残し
つつも互いにエールを送り合い、温かい雰囲
気のなかでリレートークを終了した。

(渡辺敏恵・記)

最後は石田路子副理事長のリードで斉唱。

♪「戦争を知らない子どもたち」

作詞：北山修 作曲：杉田二郎

戦争が終わって 僕らは生まれた
戦争を知らずに 僕らは育った
大人になって歩き始める
平和の歌を口ずさみながら……

「戦後80年を語り継ぐ」手記

応募作品一覧 (2025年12月13日現在)

	手記執筆者	題 名
1	渥 美 雅 子	私の戦争体験
2	間 宮 裕 子	戦後80年を語り継ぐ
3	吉 村 菜穂子	(無題)
4	袖 井 孝 子	疎開の記憶
5	衛 藤 栄津子	戦後の子ども時代など
6	稲 葉 敬 子	いつの時代も、戦争の犠牲者は子ども
7	木 内 美知子	戦争トラウマ
8	円 　　より子	私も戦争孤児だったかもしれない
9	阿 部 俊 子	戦争と私
10	田 崎 富 子	(無題)
11	小 林 すみ子	戦後80年 私が過ごしてきた年月と
12	小 堀 鷗一郎	(特別寄稿/無題)
13	並 木 きょう子	下半分が白い家族写真
14	木 村 民 子	名前の由来
15	松 田 敏 子	ジェンダー平等をめざし走り続けてきた日々
16	土 田 アイ子	今若い世代に伝えたいこと
17	林 　　千 根	戦後の物資
18	安 久 美与子	(無題)
19	白 井 千賀子	(無題)
20	柳 川 眞佐子	ある居酒屋の始まりー母の聞き書きからー
21	小 関 　　恵	(無題)

女たちの討ち入りシンポ 参加者アンケートから

戦後80年 体験を聞くことは重みが違う。二度と子どもたちに空襲に遭うようなことは経験させたくない。今新しい戦前が始まっているとも言われているが、いつまでも戦後の平和な世の中が続くことを祈っている。

私は戦争を知らない世代です。今回のような講演会に出席できて本当に戦争の怖さをあらためて感じています。

語り継ぐことの使命を痛感しました。戦後生まれの私は写真(戦争遺跡等の)を撮り、私の住む市の美術展に応募しています。松山市での全国大会の折は四国では一級の戦争遺跡を訪れ、組み写真として出品することができました。来年も桶川の陸軍飛行訓練学校等の写真で応募予定です。戦争のない世界が一日も早く訪れることを祈って!!

堂本さん、樋口さんに会えてうれしかった。戦争のことを私事として考えることが必要と思いました。

8月例会
〈第3回樋口恵子賞
受賞者に聞く勉強会〉

千葉商科大学「よろず隊」の 活動報告&学生と意見交換しよう！

2025年8月22日（金）14：00～16：00
東京ウィメンズプラザ第一会議室

報告 理事長 木村 民子



若い世代との交流を望んでいた当会は樋口恵子賞の縁で、あの昨年の猛暑の中8月例会を決行した。当日は14名の学生と会員24名が参加（Zoomも含む）。活動報告に加えて、「社会保障」「多世代交流」「戦争と平和」の3グループに分かれ、白熱した意見交換が行われた。



樋口恵子賞選考に際して



千葉商科大学の学生グループである「よろず隊」は、昨年、第3回樋口恵子賞を受賞いたしました。樋口恵子賞は、樋口名誉理事長が卒寿を迎えることを記念して創設されたものです。その狙いは、誰もが生きがいをもち安心して暮らせる超高齢社会を実現するために活動している団体、または個人を表彰することです。

しかし、第2回までの応募者には、超高齢で頑張っている方々の手柄話が少なくありません

実行委員長 袖井 孝子

でした。
選考委員会では、当初の狙いを再確認し、大学生という若い人たちの活動を受賞者に選ぶことができました。樋口恵子賞は高齢者による高齢者のための賞ではなく、年齢やジェンダーを超えて活動している方々を今後とも表彰していきたいと考えております。



シルバー新報2025年9月5日付

よろず隊とは



よろず隊は、千葉商科大学人間社会学部の学生が、近隣地域在住の方々（主に高齢者）からの依頼に基づき、家具移動・庭木の手入れ・スマホ操作などの生活支援サービスを提供する有償ボランティア団体です。依頼者とのコミュニケーションや組織マネジメントの経験によって学生の成長を図る教育プログラム（CBL：Community Based Learning）として、教員が伴走しつつ運営しています。

本学の他団体にて買い物代行を経験した学生たちが「利用者のみならず支援者にとっても望ましい生活支援サービスとするためには、また団体として財政的に自立するためには、どのような活動スタイルが望ましいか？」という問題意識をもち、自発的に検

千葉商科大学人間社会学部 学部長 齊藤 紀子

討を始めたのが2017年初頭でした。その後、高齢者サポートセンターなど専門家の助言や先行事例調査から得られた知見をもとに、2018年5月によろず隊を設立、同年8月よりサービス提供を開始しました。当初はソーシャルビジネス（社会的課題解決を目的としたビジネス）を目指していましたが、代々の学生たちの議論を経て、現在は15分あたり300円の謝礼金をいただく有償ボランティアとして活動しています。

コロナ禍には活動ができず継続が危ぶまれましたが、学生たちの強い想いによって少しずつ活動再開し、今日に至りました。2024年12月には、誰もが幸福な超高齢社会と次世代の輝く未来を創り出すことに貢献しているとして、NPO法人高齢社会をよくする女性の会より「樋口恵子賞」を受賞しました。

よろず隊の活動発表

活動紹介

謝礼金によって、住民の方が依頼を遠慮するような案件（早朝・毎日の花の水やりなど）も依頼しやすくなる上、チラシ印刷費や通信費などの費用を賄い、活動も継続しやすくなります。

サービス名	料金	備考
サービス料	15分ごと	300円
移動手配料	1台あたり	300円
+	1km以内	0円
+	1~1.5km以内	200円
+	1.5~2km以内	500円
+	2km以上	500円



活動紹介動画「詐欺防止」

最近依頼が増加しているのは、スマホ教室です。学生たちが講師を務め、高齢者の方々のスマホ使用のお悩み解決と、地域住民の方々との顔の見える関係づくりを図っています。



学生スピーチから

この会には、よろず隊メンバー学生13人が参加しました。入学した1年生から活動4年目というベテランの4年生までが、主な活動内容とそこから得た気づきや学びについて報告しました。その一部を下記に紹介します。

よろず隊の活動の特徴について

- ▶ リーダー学生が依頼者からの電話対応や対応学生との日程調整を担当しています。よろず隊の活動は多岐にわたっており、直近では入院中の留守宅にて猫の世話をしてほしいという依頼もありました。
- ▶ 大学内での地域交流イベントに出展した際は「町内会の催しで、どのような企画をしたら世代間交流が進むか」という相談を受け、一緒に、企画アイデア出しをしました。
- ▶ コロナ禍には依頼が減少しましたが、最近は口コミや樋口恵子賞受賞のおかげで回復しています。



交流がもつ意義について

- ▶ スマホ教室では、高齢者と学生が楽しそうに会話をしていました。人と人のつながりが希薄

になっている現代社会において、こうした地域のつながりを作る機会が重要だと考えています。

- ▶ スマホ教室の本当の目的は、操作方法を習得すること以上に人と人の交流にあると思いました。

学生自身の成長について

- ▶ 長期にわたり、毎朝の花の水やりに対応したことがありました。十分ご満足いただける結果にならなかった反省もありつつ、リスクマネジメント上の学びにもなりました。
- ▶ 自宅に訪問してパソコン操作支援を行う活動を通して、困りごとを具体的に知ることができました。
- ▶ 大学に入るまで表立って人と一緒に活動する機会がなかったけれど、よろず隊に入ってからさまざまな世代の人と交流することになりました。多くの方々のお役に立てて、自分の成長にもつながる活動だと考えています。（齊藤紀子・記）





学生との意見交換

社会保障は、若者にとってはあまり関心のないテーマなのか、参加した学生はわずか3人でした。しかし、よろず隊の前リーダーと現リーダーが参加してくれたことを嬉しく思います。

最初に現在の社会保障制度の問題点をかいつまんで説明しました。ピラミッド型の人口構成と経済成長を背景に創設された日本の社会保障制度は、少子高齢化や経済不況のためにその維持が困難になっています。

3人とも学生としての猶予措置を受けている

ので、年金保険料は払っていません。「どうせもらえないでしょうから、働いて貯金す

る」と言っていました。年金は、あまりあてにされていないようです。

参議院選で、「日本人ファースト」を唱え、排外主義的な主張をする政党がかなり支持を増やしました。学生からは、外国人が医療保険を使って高額な医療を受けていることへの不満が述べられました。実は平均して外国人の医療費のほうが日本人より少ないことが厚労省のデータで明らかです。こうした誤解が広まっていることに危惧の念を抱きます。

日本人は税金に対する抵抗感が強いので、政府は社会保険料をどんどん上げています。長年働いてきた会員からは、「働くようになったら必ず給与明細書をよく見るように」とのアドバイスがありました。（袖井孝子・記）



B グループ「多世代交流」

初めに自己紹介を兼ねて、学生のバックグラウンドを聞いた。全員郷里を離れて下宿をしている学生だった。学生の実家はみな核家族世帯で、祖父母と同居している直系家族世帯はいなかった。祖父母との触れ合いや交流は、年に何回か帰省する際に会う程度であった。父方より母方の祖父母により親しみを感じるという意見に妙に納得できた。

「よろず隊」の活動については、まだ経験の浅いメンバーがほとんどで、春にあったオープン・キャンパスでの高校生の進学相談やスマホ教室がこれまでの活動であった。実際に地域の高齢者宅に伺ってのサービスについてはまだこれからの段階とのこと。学生には高齢者宅に伺うというのはハードルが高いのではないだろうか。参加者からは「一人ではなく複数で伺ったほうがいい」とのアドバイスがあった。顧問の教授からの話では、利用者と学生が信頼関係を築き、利用者が入院

している間に、家の鍵を預かり、庭の草花の水やりを頼まれた女子学生もいたとのこと。残念なことに、学生は活動時間に制約があり、水やりはうまくはいかなかったようだ。学生の長期休みには対応が難しいとか、授業のない時間しか活動にあてられないなどの制約がある。

サービスの申し込みは、学校から回線を1本借りていて、電話は学生の携帯につながり、留守電に吹き込まれるとのこと。依頼は学生が申込者とのやり取りのうえ、メンバーのグループラインに流すというやり方をしている。

次年度からは活動が単位として認められるという動きもある。

学生のボランティア活動がうまく回って活発になることを期待している。

（昼間洋子・記）



冒頭に「戦争と平和を語るグループになって、どうでした」と尋ねました。「テーマが重すぎ、自分が何を話せるのか、まったく自信がありません」と皆さん口を揃えます。それでも、これまで戦争に関して「みたり、きいたり、はなしたりした、どんなことでもいいから思い出してください」と促しました。

すると、「私は、映画『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』を観て、戦争を身近に感じました。映画は、現代の女子高生が1945年の戦時中にタイムスリップし特攻隊員に出会い惹

かれていく。まもなく現代社会に戻ってきた彼女は、改めて戦争で命を落とした人たちがいるお蔭で、今の平和な日本



があることを実感するというストーリーでした」

「僕は、修学旅行で広島の実爆ドームを見学し、そこにある数多くの写真や原爆に関するさまざまな資料を目の当たりにし、戦争の怖さを実感しました」といったエピソードを語ってくれました。

また、「最近『日本人ファースト』といって外国人を排斥しようとする動きがあるけれど、どのように思っていますか」という質問には、「外国人への攻撃は賛成できない」「SNSなどに書かれている誹謗中傷なども鵜呑みにせず、友人などと話し合って何が正しいかを判断している」という頼もしい答えが返ってきました。

もう少し時間があればという思いがありますが、貴重な時間を過ごせたように思います。

(石田路子・記)

学生の感想

Aグループ「社会保障」

私達は、「社会保障」をテーマに、その知識や今の課題の認識を統一させた上で、会員の方から「自分が高齢者になった時、日本はどうなっていると思うか」を問われ、ぼんやりとしかイメージが湧かなかったことに対し、自分の未熟さを痛感しました。年金の免除対象であったり、自分の年金支払いを親に代わってもらっていたりする現状のため、それを含む社会保障への問題点に気づけないのかもしれない。しかし、他人事ではない、社会保障が崩れる未来がすぐそこまで来ている、そんな危機感に気づく議論となりました。

(大内琉加)

Bグループ「他世代交流」

今回の世代間交流を通して、普段なかなか接する機会のない高齢者の方々と直接お話しすることができ、非常に貴重な体験となりました。限られた時間の中でも、世代間での価値観や表現の違いに気づき、驚きや学びが多くありました。例えば「8時10分前」の解釈のような些細な違いからも、時代背景の違いが感じられ、興

味深かったです。また、高齢者の方々から「学生には時間を大切にしてほしい」というやさしい言葉をいただき、心が温まりました。短い時間ではありましたが、世代を超えたつながりの大切さを改めて実感し、今後もこのような交流を継続していきたいと強く感じました。

※若者世代(10-20代)は「8時10分前」8時10分の前を思い浮かべる。昭和世代は「7時50分」を思い浮かべる。

(大西陸斗・大塚舜)

Cグループ「戦争と平和」

歴史や政治の観点から考えることで、今までの戦争へのイメージや価値観を改めるいい機会になりました。戦争をなくすためには、対立している双方が納得できる環境づくりが重要だと感じましたが、グループの中だけでも様々な異なる意見や考え方がありました。少人数でも意見をまとめることが難しいのに、国や文化が異なる多くの人々の意見をまとめ納得できる環境にすることはより困難だと思います。しかし、困難であるから戦争を繰り返すのではなく今を生きる私達が歴史や現状を学び、繰り返される戦争を止める方法を見つける必要があると思いました。

(坂果歩・菊池百合子)



第4回 樋口恵子賞 発表 表彰式

2025年12月13日(土) 於/東京ウィメンズプラザホール



樋口恵子賞は、4回目を迎えることができました。こういう賞は回を重ねるごとに応募者が減少するのが通例なのですが、なんと今回の応募者数は113件に上り、これまでの最高です。

これは、メディアや各地の社会福祉会のご協力に加えて、会員の皆様の口コミによる効果が大きかったことがあげられます。今後とも、よろしくお願いいたします。

2回目までは首都圏近郊からの高齢者の応募が多かったのですが、次第に地域が拡大してきたことに加えて、今回は活動内容も多様化しました。これまでは、高齢者、とりわけ高齢女性が、生活上の諸困難を抱える高齢者を支

援する活動が中心でしたが、今回は子育て支援、シングル女性の直面する問題、ホームレスやLGBTQなどマイノリティへの支援、発展途上国への支援など、その範囲が拡大しました。

この度の表彰式では、選考委員の渥美雅子氏、浅倉むつ子氏より、受賞者の皆様へお祝いの言葉とともに表彰状が授与されました。続いて、選考委員を代表して新田國夫氏より総評をいただきました。新田氏からは、「女性パワー」への惜しみない賞賛が送られるとともに、選考委員の中で“黒一点”として孤軍奮闘されたユーモアあふれる苦勞談も語られ、新田氏ならではの視点に、会場は温かな笑いに包まれました。(袖井孝子・記)



樋口恵子賞受賞者と関係者の皆様



木村理事長からのあいさつ



袖井孝子実行委員長



樋口恵子名誉理事長



第4回 樋口恵子賞 受賞者紹介

相川明子

(神奈川県：個人受賞)

青空自主保育の草分け的存在であるなかよし会を発足。神奈川県谷戸の自然を残しながら幼児保育を長年にわたり継続。15年間、父母たちとともに自然保全を市に訴えた結果、自然を残す形で公園が開園。現在は農作業体験なども実施されています。



評価のポイント

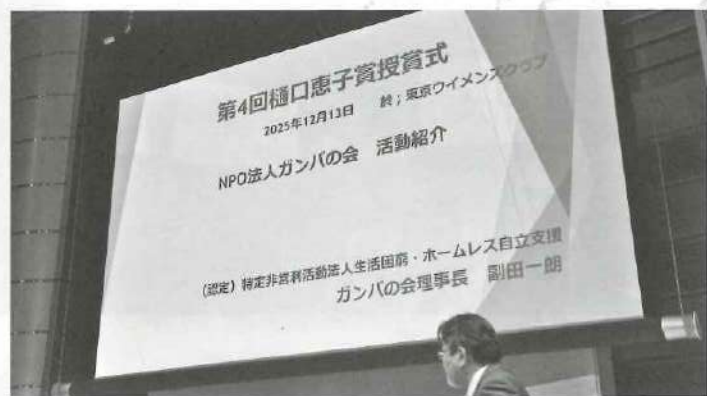
子どもの自主性を育む姿勢で、長きにわたる保育を実践。活動は映画として全国にも発信され影響をあたえている。また活動拠点である谷戸の開発計画が発表

されてからは、貴重な谷戸の自然を保全するために自治体に働きかけ大きな成果を上げたことも評価された。

特定非営利活動法人 生活困窮・ホームレス自立支援ガンバの会

(千葉県 代表：副田一郎)

千葉縣市川市内で路上生活者が急増する中で夜間パトロールを始め、食料・衣料品・アパート入居支援等の継続的支援を展開。現在は住宅や生活・通院等の支援、葬祭・墓地運営まで人間の尊厳を守ることがを目的に様々な活動を行っています。



評価のポイント

現行制度では支えきれず、地域社会からも疎外されている人々を長年にわたり地道に民間で支えてきた。本人の尊厳を

保ちながら住居の問題から、就職、葬祭、墓地管理とその内容は死後事務までを含んでいることから大きな評価につながった。

NPO法人虹色の会 よっちゃん家井野川

(群馬県 代表：池田優子)

元看護職や看護教員などが集まり、子どもから高齢者まで誰もが安心して集える場所を作ろうと、空き家を拠点に始めました。寄付食品の配布活動、ランチ作り、演奏、認知症サポーター養成研修など経験を生かした活動を実施しています。



評価のポイント

経験を生かした取り組みは地域に信頼感を与え、子どもからシングルマザー、障害者まで幅広く身近な相談や社会参加の推進にもつながっている。また認知症

サポーター養成研修など、経験を生かした取り組みも評価された。



わくわくシニアシングلز

(東京都 代表：大矢さよ子)

女性の貧困の連鎖を止め、誰もが安心して高齢期を過ごせる社会を目指し活動。中高年単身女性の困窮と実情を可視化した実態調査の報告書をまとめ、関係省庁、マスコミ等に配布し、支援を訴えるとともに単身女性への制度改正なども要望しています。



評価のポイント

中高年シングル女性が持つ問題を明確なテーマとし、実態を丁寧に調査し政策提言を行い、環境の改善につなげている。関係省庁にとどまらずマスコミなどにも

情報を提供し支援を訴えている。女性の経済的自立を妨げない年金制度改正を要望するなどの積極的な活動も評価された。



『シニアの星』

御木本あかり 著
小学館文庫 730円+税

年を取るって面白くないじゃないですか。仕事は減り、容姿はたるみ、体は衰え、社会から疎んじられていく。そしてこの現象は年々、濃くなるばかり。腹立たしいです、実に気に入らない。

主人公の評論家・綿帽子時子もそのただ中です。生活があるのに仕事は激減し、同居する秘書役の姪・正美からは、「どうする気よ」と責められています。頼みの担当編集者・内山君は頼りなく、親友・千春さん、匡子さんも自分のことで頭がいっぱいで、時子のことなんか構ってくれません。

でも、時子女史はくじけません。内心はメゲていても、「私は綿帽子時子なのよ!」と豪語し、これまでどおりの傲岸不遜を貫こうとします。だって、年取ることは、解放されることでもあるのだから。

高齢者問題てんこ盛りの小説となりました。笑って怒って、そうそう! と共感していただければ作者冥利です。

(御木本あかり・記)

> 事務局だより

☆今年度最終の会報をお送りいたします。

6月の総会ご案内チラシとご出欠ハガキ、2026年度会費振込用紙(新年度会費前納済みの方にはお入れしていません)を同封しております。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。総会にご欠席の方もハガキで委任状のご提出をお願いいたします。

☆12/13の討ち入りシンポで募集した「戦後80年」手記文集をお届けします。貴重な記録としてお読みいただければ幸いです。

ご報告

～能登半島地震支援・その後～

会報302号で、皆様からの支援金を穴水高校へお届けしたとお伝えしました。更にテント購入する旨の連絡もあり、その後の昨年10月21日の体育祭での写真が島崎康一校長先生から送られてきました。向かって右側の緑色テントです。簡単設置のテントで、これで3学年分が揃ったと全生徒87名と共に喜びの様子が伝わってきます。

石川県21ネットワークが夏に開催した『石川女性模擬県議会』で、発災当時穴水高校の2、3年生だった4名に被災体験と町の未来図を大人たちと描いた会議の様子を発信してもらいました。また、会場での「生理の尊厳募金」で、女生徒44名に昼用・夜用ナプキンを届けましたが、「うれしい～、助かる～」との養護の先生の声が忘れられません。

校舎内の修復、水道・トイレの復旧等は今も途上にある中で、元日が巡ってきました。(常光利恵)



2025年10月21日 穴水高校体育祭で設置のテント

◎ご寄付お礼 山田純子様(会員)のご遺志としてご遺族から10万円のご寄付をいただきました。ご冥福をお祈りするとともに、長年のご支援とご厚意に深く感謝申し上げます。

編集後記

今号は前半を木村、後半を鬼塚、最終頁を事務局佐藤が担当しました。なお、前号14頁に編集担当(木村)が補足した一文に誤りがあり、「数日前」は正しくは「3月前」でした。訂正してお詫びいたします。(編集チーム)